「マーケットの浅読み・深読み」
発行・編集：FXニュースレター　　執筆担当：斎藤登美夫
▼▲▼
◇◆◇　No.0775　◇◆◇　　24/02/07

【 「月間大相場」はいまだ終わらず!?　2 月大変動にも期待 】

先日終了した 1 月のドル/円相場は、月間変動幅がちょうど 8.00 円（140.80-148.80 円）。そして、前月である昨年 12 月相場も月間を通して 8.08 円の変動を記録していた。
昨年 8-11 月の月間変動が平均 5.2 円にとどまったことで、筆者は当レターにおいてそののち「大相場の連続がいよいよ終わりを迎えた」－－などとレポートしていたが、実はまだ大相場は終わっていなかった可能性が高まっている。では仮に、足もとの 2 月相場もそんな大相場が続くとし、1 月の流れを踏襲した場合、150 円突破どころか 155 円程度のドル高・円安があっても不思議はではないのだが果たして実際はどう動くのだろうか。

◎ドル続伸なら 2022 年高値 151.94 円更新も否定できず

さて、そんな 1 月相場を受けた足もと 2 月相場について、過去の経験則を参考に考えてみたい。
以下で 2 月相場の特徴についてレポートするうえで、まずは勝敗・星取表をみておく。1990 年以降昨年まで過去 34 年は 16 勝 18 敗だった。ほぼ五分と言ってよい内容で、これは特徴と言えないようだ。ただし、2020 年以降過去 4 年間だけに絞ると、「ドル安、ドル高、ドル安、ドル高」と交互にドル高とドル安が繰り返されている。それからすると、今年はドル安有利であるのかもしれない。実は 1 月の流れに反するドル反動安に要注意か。

しかし、別の特徴を調べてみると、「動くときには大きく動くが動かない年はまったく動かない」－－という両極端になり易い傾向が強くうかがえることがわかった。
たとえば、年間を通して大きく動く月の多かった昨 2023 年においても、実は一番大きく動いたのが 2 月。月間変動は 8.82 円を記録している。また、2009 年や 2012 年の 2 月も年間でもっとも変動した月となっているうえ、2016 年は順位的に年間 3 位に留まったものの、月間の変動幅は 10.45 円とかなり大きな動きをたどっていた。

その反面、「まったく動かない」年の典型は、なんといっても 2022 年。月間変動幅はわずか 2.18 円で、ダントツの年間最下位だった。また 2014 年の 2 月もやはり 2.1 円の変動で年間 10 位、2017 年も月間変動幅は 3.36 円、同 9 位に終わるなど、年間を通して動きの鈍い 1ヵ月を記録している。
果たして今年の 2 月相場は「動く」or「動かない」どちらのパターンをたどるのか。正直「神のみぞ知る」ところではあるものの、前述したようにすでに終了したと考えていた「大相場の連続」がまだ続いていたとするならば、「2 月も･･･」と大きな動意をたどることを是非とも期待したい。1 月の流れを継ぐ展開となれば、リスクはドル高方向にバイアスが掛かり、150 円を超えるだけでなく 151.92 円そして 151.94 円という直近そして 2022 年高値を超えていく展開も否定できないようだ。

なお、前記の 2 月相場が「動くときには大きく動くが動かない年はまったく動かない」－－という両極端の価格変動になり易い傾向は、ドル/円だけに限ったことでない。実はユーロ/円やポンド/円など円絡みのほかの通貨ペア全般にみられる特徴だということも、一応付記しておきたい。

一方、カレンダー的な側面から 2 月の出来事を調べてみると、過去の 2 月は重要事象それも為替や金融に関することが多いことがわかった。
一例を挙げると、「日本が新円へ切り替え（1946 年）」、「ドル/円が変動相場制へ移行（1973 年）」、「ドル安に歯止めをかけるルーブル合意（1987 年）」、「G7 声明で『ドル安是正終了』を宣言（1997 年）」などのほか、比較的最近には「G7 が『為替は市場で決定されるべき』との緊急共同声明を発表（2013 年）」、「日本の長期金利が初めてマイナスに（2016 年）」－－といった事象が起こっている。

もちろん、こうした事象は毎年確実に起こるというものではないが、今年でいえばロシアのルーブル相場は言うまでもないうえ、不動産リスクをはじめとする様々な中国情勢を受けた中国株、そして人民元相場などの動きも気掛かりではある。中東などを含めた世界情勢を勘案すると、何が起こっても不思議はないことで、世界を驚かすニュースが飛び込んでくることがある気もしないではない。（了）

▼▲▼▲▼▲